

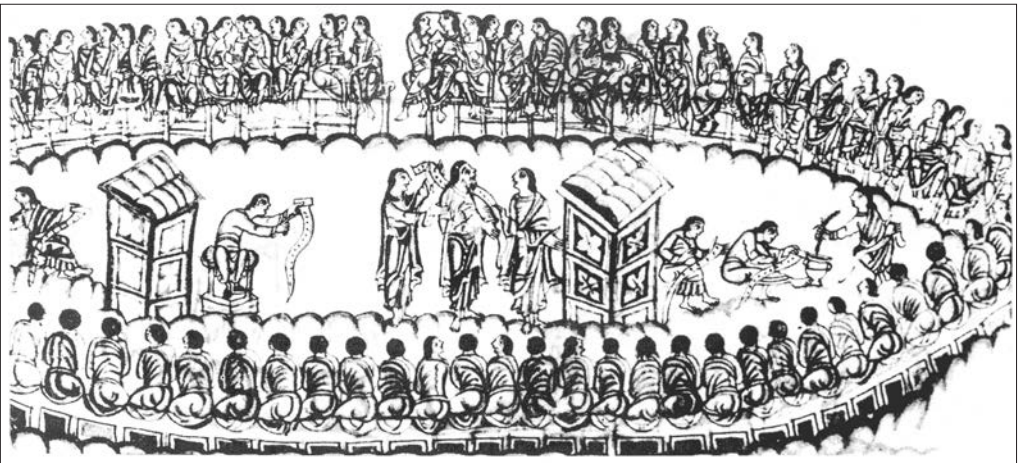
日本中世英語英文学会 第38回全国大会

プログラム・発表要旨

時：2022年12月3日(土)～4日(日)

所：ウェブカンファレンス方式

The 38th Congress
The Japan Society for Medieval English Studies
3-4 December 2022
Web Conference



日本中世英語英文学会

目 次

会長挨拶	3
プログラム	4
Programme in English	7
発表要旨	研究発表 1 ～ 15
	10

会員の皆様におかれましては、別途お伝えする
Zoom のパスコードや HP のパスワードを控えたうえで、
大会サイトへアクセスして下さい。

- ◆ 発表者のハンドアウトは大会サイトに掲載されます。
- ◆ 万一接続不備があった場合、発表の順番が前後する可能性がありますのでご了承下さい。
- ◆ 「当日会員」は無料です。事務局まで E メールでご連絡くだされば、大会サイト入場、および Zoom ミーティング参加に必要な情報をお渡しします。

大会準備委員

鎌田幸雄（委員長） 平山直樹（副委員長）
岡崎久美子 小笠原清香 岡田 晃 野地 薫 藤井香子

事務局

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学 文学部 大沼由布研究室内
TEL : 075-251-3770 E-mail: jsmes.2122@gmail.com

会 長 挨拶

会員の皆様

第38回全国大会にようこそ！本来であれば、曹洞宗の大本山、永平寺まで車で半時間足らずの距離にある福井大学で開催される予定でした。しかし、何ということでしょう、今年もコロナが収まらず、会員の皆様の安全を期して、対面での開催を断念せざるを得ませんでした。昨年度と一昨年度に続き3回目のオンライン開催となりました。そのような中で、明るいニュースは様々な世代と分野にわたる研究者によって、今回、15もの発表が行われることです。特別講演には Harvard University の James Simpson 先生をお招きし、リアルタイムでお話をうかがうことになりました。さらに、学会の目玉の一つである研究助成セミナーでは、研究助成委員会の皆さまのご尽力により University of St Andrews の Christine Rauer 先生をお迎えし、こちらもリアルタイムでのオンラインセミナーになったことを非常に嬉しく思います。これで、2022年12月の学会は、福井をはじめとする日本全国をアメリカ、そしてスコットランドとライブでつなぐ大会になりました。非常に困難な時代ではありますが、皆様のご協力のお蔭で、今年も非常に充実したプログラムとなりました。心より御礼申し上げます。

対面での学会を期待しておられたであろう発表者の方々には、やむなくオンライン方式の発表に切り替わることをご理解くださり誠に有難うございました。そして、お忙しい中、今日ここに至るまで、今回のプログラムの作成と大会実施にご尽力くださった鎌田委員長をはじめとする大会準備委員の先生方、平日休日祝日昼夜問わず精力的かつ綿密に仕事をしてくださった大沼事務局長、いつも慎重な助言をくださった鈴木副会長、そして、今年も技術面を力強くサポートして下さり、どんな要望にも迅速に対応して下さった柳先生に心より御礼申し上げます。それでは、いよいよ開幕です。第38回のプログラムをどうぞお楽しみください。

(昨年この挨拶の最後に同じことを書きましたが、こんどこそ) 来年は3Dで皆さまにお会いしてお話出来ますことを祈りつつ。

2022年10月吉日

日本中世英語英文学会

会長 和田 葉子

日本中世英語英文学会 第38回全国大会プログラム

2022年12月3日(土) 13:00～4日(日) 13:15 Zoom 開催
資料揭示期間：2022年12月3日(土) 13:00～11日(日) 13:00

第1日 12月3日(土)

13:00～13:20 開会式

開会の言葉 会長 和田葉子（関西大学名誉教授）
総会
事務局報告 事務局長 大沼由布（同志社大学）

13:30～16:40 研究発表 I

13:30～14:10 司会 唐澤一友（立教大学）

1. 「戦士」と「王」—『ベオウルフ』の類義語に対する意味論・歴史的 analysis
木内祥太（慶應義塾大学大学院）

14:20～15:00 司会 網代 敦（大東文化大学）

2. 古英語における話題の転換に伴う表現方法
海田皓介（明治大学）

15:10～15:50 司会 大野英志（広島大学）

3. 文法的に明確な分類ができない古英語の事例の考察
石黒太郎（明治大学）

16:00～16:40 司会 寺澤 盾（青山学院大学）

4. 非頭韻語としての Old Norse, Old French 借入語
小倉美知子（千葉大学名誉教授）

13:30～16:40 研究発表 II

13:30～14:10 司会 高木眞佐子（杏林大学）

5. ‘To Telle Hir Worde’: *The Assembly of Ladies* におけるクリスティーヌ・ド・ピザンの影響
小林亜伽里（慶應義塾大学大学院）

14:20~15:00 司会 工藤義信（石川県立看護大学）

6. *Sir Amadace* における商人の贈与と交換

福岡里桜（慶應義塾大学大学院）

15:10~15:50 司会 吉川史子（広島修道大学）

7. カンタベリのアンセルムスの『瞑想』と『祈り』: *Ancrene Wisse* の
conscience の引用元としての一考察

井野崎千代子（京都先端科学大学嘱託講師）

16:00~16:40 司会 松田隆美（慶應義塾大学）

8. Reginald Pecock's 'Probable' and 'Likely' God

井口 篤（慶應義塾大学）

16:50~17:50 招待講演

司会 和田葉子（関西大学名誉教授）

The Huntington Ellesmere Manuscript: The Once and Future *Canterbury Tales*

Professor James Simpson (Harvard University)

第2日 12月4日(日)

10:00~13:10 研究発表 III

10:00~10:40 司会 徳永聡子（慶應義塾大学）

9. 15, 16世紀の写本と刊本における *Virtues of the Mass* の受容

新居達也（ロンドン大学クイーンメアリー校 PhD candidate）

10:50~11:30 司会 西村秀夫（三重大学名誉教授）

10. 多用途検索ツール「A Chaucer Lexicon」を用いた「恋の病」の解析
—チャウサーの『トロイルスとクリセイデ』を中心に—

周 躍（呉工業高等専門学校）

11:40~12:20 司会 家入葉子（京都大学）

11. Middle English *mister*: Reassessment as a verb of need

三浦あゆみ（大阪大学）

12:30～13:10 司会 岡本広毅（立命館大学）

12. 14世紀頭韻詩韻律研究の現況と展望

— 『ガウエイン』 詩人の作品における前半行を中心に—

井上典子（関西大学）

10:00～12:20 研究発表 IV

10:00～10:40 司会 福田一貴（駒澤大学）

13. 古英語の強変化動詞第Ⅳ,Ⅴ類における過去複数形の長母音について

藤原郁弥（大阪大学大学院）

10:50～11:30 司会 保坂道雄（日本大学）

14. デヴォン州の地名 Misdon の語源再考

宅間雅哉（東京未来大学）

11:40～12:20 司会 中尾佳行（広島大学名誉教授）

15. 中世英語英文学受容史：明治編

海老久人（神戸女子大学古典芸能研究センター客員研究員）

13:10～13:15 閉会の言葉

副会長 鈴木敬了（大東文化大学）

PROGRAMME

SATURDAY 3 DECEMBER

13:00~13:20 Plenary Session

Opening Address

WADA, Yoko, President of JSMES,
Professor Emerita, Kansai University

General Meeting with Reports and Announcements from the JSMES Office
ONUMA, Yu, General Secretary of JSMES, Doshisha University

13:30~16:40 Paper Sessions I

13:30~14:10 Presider: KARASAWA, Kazutomo, Rikkyo/St Paul's University

1. 'Warrior' and 'Lord': A Semasiological and Historical Analysis of
Synonyms in *Beowulf* KIUCHI, Shota, Keio University

14:20~15:00 Presider: AJIRO, Atsushi, Daito Bunka University

2. Topic Change and its Related Expressions in Old English
KAITA, Kousuke, Meiji University

15:10~15:50 Presider: OHNO, Hideshi, Hiroshima University

3. Some Old English Examples that Defy Clear-Cut Grammatical Classification
ISHIGURO, Taro, Meiji University

16:00~16:40 Presider: TERASAWA, Jun, Aoyama Gakuin University

4. Old Norse and Old French Loans as Non-alliterating Words
OGURA, Michiko, Professor Emeritus, Chiba University

13:30~16:40 Paper Sessions II

13:30~14:10 Presider: TAKAGI, Masako, Kyorin University

5. 'To Telle Hir Worde': Reading the Influence of Christine de Pizan in
The Assembly of Ladies KOBAYASHI, Akari, Keio University

14:20~15:00 President: KUDO, Yoshinobu, Ishikawa Prefectural Nursing University

6. Gift Exchange of Merchants in *Sir Amadace*

FUKUOKA, Rio, Keio University

15:10~15:50 President: YOSHIKAWA, Fumiko, Hiroshima Shudo University

7. *Meditatio* and *Oratio* of Anselm of Canterbury: As Origin of *Conscience*
in *Ancrene Wisse*

INOSAKI, Chiyoko, Kyoto University of Advanced Science

16:00~16:40 President: MATSUDA, Takami, Keio University

8. Reginald Pecock's 'Probable' and 'Likely' God

IGUCHI, Atsushi, Keio University

16:50~17:50 Invited Lecture

President: WADA, Yoko, President of JSMES,

Professor Emerita, Kansai University

The Huntington Ellesmere Manuscript: The Once and Future *Canterbury Tales*

Professor James Simpson, Harvard University

SUNDAY 4 DECEMBER

10:00~13:10 Paper Sessions III

10:00~10:40 President: TOKUNAGA, Satoko, Keio University

9. The Fifteenth- and Sixteenth-Century Reception of John Lydgate's
Virtues of the Mass in Manuscript and Print

NII, Tatsuya, Queen Mary, University of London

10:50~11:30 President: NISHIMURA, Hideo, Professor Emeritus, Mie University

10. An Analysis of 'Love Sickness' by Using the Multifunctional 'A Chaucer
Lexicon'—With Special References to Chaucer's *Troilus and Criseyde*—

ZHOU, Yue, National Institute of Technology, Kure College

11:40~12:20 Presider: IYEIRI, Yoko, Kyoto University

11. Middle English *mister*: Reassessment as a verb of need

MIURA, Ayumi, Osaka University

12:30~13:10 Presider: OKAMOTO, Hiroki, Ritsumeikan University

12. Latest Findings and Prospects of the 14th Century Alliterative Verse
Metre Studies: The A-Verses in the Works of the *Gawain* Poet

INOUE, Noriko, Kansai University

10:00~13:10 Paper Sessions IV

10:00~10:40 Presider: FUKUDA, Kazutaka, Komazawa University

13. On the Lengthened Vowel in the Preterite Plural of the Class IV and
V Strong Verbs

FUJIWARA, Fumiya, Osaka University

10:50~11:30 Presider: HOSAKA, Michio, Nihon University

14. Etymology of the Place-Name Misdon in Devon Reconsidered

TAKUMA, Masaya, Tokyo Future University

11:40~12:20 Presider: NAKAO, Yoshiyuki, Professor Emeritus, Hiroshima
University

15. A Historical Perspective on the Acceptance in Meiji Era of Medieval
English Literature

EBI, Hisato, Research Fellow,
Research Center of Classic Performing Arts, Kobe Women's University

13:10~13:15 Closing Address

SUZUKI, Hironori, Vice-President of JSMES, Daito Bunka University

発表要旨

第1日 12月3日(土)

13:30～16:40 研究発表 I

1. 「戦士」と「王」－『ベーオウルフ』の類義語に対する意味論・歴史的分析

木内祥太 (慶應義塾大学大学院)

これまで「戦士」と「王」を研究した代表的なものとして Strauß (1974) と Brady (1983) が挙げられる。前者は広く古英語作品を対象に「戦士」と「王」を、後者は『ベーオウルフ』を対象に「戦士」の複合名詞を分析した。2人の研究は有益な成果を豊富に含みつつも、歴史的な視点が欠けている。この問題点を補うために、本研究では『ベーオウルフ』を対象に、「意味」の記述を明確にしながら、この作品限りの pseudo-comitatus (王を頂点とした社会構造) を設定し、それらの関係性に迫っていく。まず『ベーオウルフ』限りの comitatus は、『ゲルマーニア』に見られる特徴は残しつつも『モールドンの戦い』にまで通ずるような性格を有したものとする。そして、これと関連している語が『ベーオウルフ』には存在する。また、Ogden-Richards から始まったいわゆる「意味の三角形」を参考に「戦士」と「王」の意味を規定すると、言語上の意味的關係性を明示することができる。このような歴史的・言語的観点を含わせると、「戦士」と「王」にはこの時代特有の密接な関係性があったと考えられる。

2. 古英語における話題の転換に伴う表現方法

海田皓介 (明治大学)

古英語の文章では、話題を読者や聴衆に効果的に伝える手段として、話題の転換の工夫がある。これを表す形には (i) 文頭の本動詞 + 主語, (ii) 副詞 *nu* 'now' + 本動詞 + 主語, (iii) 助動詞 *uton* 'let us' + 主語 + 原形不定詞, (iv) 法助動詞 + 主語 + 原形不定詞がある。特に (iii) は主語が 1 人称複数か双数となり、作者や語り手が読者や聴衆と共にある行為を成すよう呼びかける「勧誘」(adhortative) の概念を表す。(i), (ii), (iv) もこうした主語を伴うことがある。そこで本発表は、(i)-(iv) の構造に 1 人称複数または双数主語が伴う用例を *The Dictionary of Old English Web Corpus* から採り、それぞれにどのような

違いがあるかを議論する。特に話題の転換と「勧誘」との関係や、本動詞を用いる構造と助動詞を用いる構造の違いを考える。ここから、古英語における話題の提示方法の詳細を明らかにしたい。

3. 文法的に明確な分類ができない古英語の事例の考察

石黒太郎（明治大学）

David Crystal (2017: 183-84) は Shakespeare の *nor never* のような用例を “bad grammar” と一般のひとが評する行為を “an unwarrantable imposition of modern values” と呼んでいるが、研究者である我々も中世の英語を現代英文法の枠のなかに押しこめようとしてはいないであろうか。

本発表は現代英語の記述にもちいる概念や用語では十分にとらえきれない古英語の問題を取り上げる。いわゆる *phrasal impersonals* にあらわれる語の品詞分類、*parentheses* や *correlative constructions* にみられる節のつながり、このふたつについて考察する。古英語には韻文特有の文法があったという認識のもとで研究が進んでいる韻文の事例を足がかりとして、散文テキストの校訂者の視点から、節と節のつながりの見極めがむずかしい散文の例を考察する。必ずしも明確でない、ゆるやかでおおらかな古英語の姿を認めたい。

4. 非頭韻語としての Old Norse, Old French 借入語

小倉美知子（千葉大学名誉教授）

古英語頭韻詩の場合、借入語はほとんどなかったため、本来語が頭韻位置を占めていた。14世紀後半の *Alliterative Revival* では、*Gawain-poet* に代表されるように Old French や Old Norse 借入語が目立つようになる。13世紀後半、Old French 訳の *Lazamon's Brut* では、Otho 写本 (O) で Old French 借入語が多いのに対し *Caligula* 写本 (C) では借入語を避けていると言われてきたが、Roberts (2019) はこれに対して異議を唱えている。Old French 借入語自体はすでに13世紀前半にかなり流入してきているが、その扱いが *Lazamon* 2写本 の関係をより明確にするとしたら興味深い。本発表では、Old French, Old Norse 借入語が *non-alliterating stressed position* で用いられることを通じて、13世紀から14世紀にかけての頭韻詩での借入語の扱い方の変化を例証する。

5. ‘To Telle Hir Worde’: *The Assembly of Ladies* におけるクリスティーヌ・ド・ピザンの影響

小林亜伽里（慶應義塾大学大学院）

本発表は、15世紀イングランドで書かれた匿名の夢物語詩 *The Assembly of Ladies* が女性の作者によって書かれたと仮定し、本詩がいかにして、同世紀にフランスで活動し、イングランドでも盛んに受容された作家クリスティーヌ・ド・ピザンの影響を受けながら独自の美学を発展させたかを論じる。

The Assembly of Ladies は女性の服飾とその製産に関連するイメージを多用するが、本作の織物 (the textile/textus) への関心とそれを取り巻く不安は、テキスト (the textual/textus) とその製産にまつわる女性作者の不安の換喩として機能していると言える。「女性の仕事」としてしばしば軽んじられた機織りや刺繍はクリスティーヌが『婦女の都』において女性特有の語りの手法として擁護した技術であり、テキストと織物という二つの *textus* の製産の交わりの中に、ある種の15世紀的「女性のエクリチュール」を見出すことができる。また *The Assembly of Ladies* においては青という衣服の色が語り手を含む女性たちのアイデンティティ表現にとって重要な意義を持つが、青はクリスティーヌが自身の知性の象徴として意識的に選んで身につけた色であり、したがって本詩は美的表現においてのみならず、作者のアイデンティティ形成においても、クリスティーヌから影響を受けたと論じられる。

6. *Sir Amadace* における商人の贈与と交換

福岡里桜（慶應義塾大学大学院）

本発表では中世英国ロマンス作品 *Sir Amadace* に登場する対照的な二人の商人を考察の対象にしながら、彼らの行う交換行為をその性質によって分類することで、互恵的な人間関係の構築を試みる商人の行動規範を明らかにする。文化人類学的知見を用いて中世イングランドの文学作品を論じた Robert Epstein の *Chaucer's Gifts* や Nicholas Perkins の *The Gift of Narrative in Medieval England* は、将来的な人間関係の構築を目的とする不均衡なやり取り (gift exchange) と経済的な利益を目的としたその場限りのやり取り (commercial exchange) という二項対立的な概念を採用している。本発表では先行研究で用いられたこの概念を援用し、*Sir Amadace* に描かれる商人が利益の追求を目

指す commercial exchange だけではなく、gift exchange をも為す存在として描かれている点を指摘する。また、物語において異なる階級に属する人物が行う exchange の性質と比較することで、この物語が単に寛大さと貪欲さを対照的に描いた教訓的ロマンスではなく、単純な利益追求のみと考えられてきた商人の行動規範に、他者との互恵的な関係性の構築というもう一つの重要な目的意識を加えることで、他者との応酬の対照的な方法を前景化した「商人のロマンス」という一面をもつことを明らかにする。

7. カンタベリのアンセルムスの『瞑想』と『祈り』: *Ancrene Wisse* の conscience の引用元としての一考察

井野崎千代子 (京都先端科学大学嘱託講師)

13世紀初頭に原本が書かれたとされる *Ancrene Wisse* の第5章「告白」は、自己の「良心」(conscience)によって罪を認識し、赦しの秘蹟を行うよう誘う。その「良心」を含む叙述について、Millett (2005) は、カンタベリのアンセルムス (1033-1109) の『瞑想』(*Meditatio I*)にある1箇所を、引用元、あるいは参照箇所として紹介している。アンセルムスは、*Ancrene Wisse* の中で、聖書以外からの作品のうち、名前が記載されている数少ない作者の一人であり、この第5章の引用箇所の *Ancrene Wisse* における重要性を考えると、本作品において極めて重要な役割を果たしていると考えられる。

まず、Millett が挙げた『瞑想』(*Meditatio I*)における conscience の表出を検証し、*Ancrene Wisse* に引用された箇所の位置付けを検証したい。次に、中世において大量の模倣作品が流布したアンセルムスの『瞑想』(*Meditatio*)であるが、アンセルムスのものとされる『瞑想』の現存作品は、*Meditatio I*, *II*, *III* の3作品とされ、後者2作品における conscience についても検証したい。その後、同じく彼自身の純正な19の『祈り』(*Oratio*)における conscience を検証し、『瞑想』の状況と比較したい。これらの方法をとることによって、*Ancrene Wisse* に見られる *Meditatio I* からの conscience 引用箇所について考察する手がかりとしたい。

8. Reginald Pecock's 'Probable' and 'Likely' God

井口 篤 (慶應義塾大学)

This paper will explore the way the fifteenth-century theologian Reginald Pecock attempts to prove that God is 'a maker unmade'. Pecock's

proof of the existence of God is found in *The Reule of Cristen Religioun*, his earliest extant vernacular writing (c. 1443). In the *Reule*, Pecock presents God and his attributes as perceivable from our finite experience and intellect. What distinguishes Pecock's approach from those of his precursors is that he attempts to show that it's possible for humans to perceive God through what he calls 'doom of reason' and 'natural knowing'.

In this paper, Pecock's epistemology of God will be contrasted with the more rigorous counterpart, conducted by his intellectual predecessors, to see how scholastic and Latinate Pecock really was. For Pecock, the existence of God and many other theological issues related to it do *not* have to be demonstrated with the kind of necessity and finality typically seen in the works of scholastic theologians such as Aquinas and Scotus. On the contrary, Pecock thought it was enough to prove that God's existence was 'probable' and 'likely'.

The paper will conclude by arguing that Pecock's effort to explain the infinite existence via finitude forms the basis of his epistemological approach to God, a method which enables his vernacular reader to perceive God by having recourse to his or her limited and fallible human resources, i.e. rational argument.

第2日 12月4日(日)

10:00~13:10 研究発表 Ⅲ

9. 15, 16世紀の写本と刊本における *Virtues of the Mass* の受容

新居達也 (ロンドン大学クイーンメアリー校 PhD candidate)

ジョン・リドゲイト (c. 1370-1449) による *Virtues of the Mass* (NIMEV 4246) は主に平信徒の読者を対象としてミサ典礼の意義を解説する教訓詩である。元来、サフォーク伯夫人アリス・チョーサーのために執筆されたとされるこの作品は、15世紀後半から16世紀初頭にかけて制作された10点の写本と2点の刊本によって現存しており、中英語韻文作品としては比較的広く読まれたことが窺われる。しかし、早期受容における人気とは裏腹に、実用的で平凡と見做されがちな内容を取り扱った本作品が現在の中世文学研究で取り上げられ

ることは極めて稀である。

本発表では、現存写本と刊本から *Virtues of the Mass* の読者層と書物史的なコンテクストを中心に考察し、受容の背景に存在した美学を明らかにすることを目指す。加えて、15、16世紀イングランドにおける書物生産や宗教文化史などの外的要因も併せて考察することで、*Virtues of the Mass* に対する同時代的な受容態度がいかに形成されたかを検証したい。

10. 多用途検索ツール「A Chaucer Lexicon」を用いた「恋の病」の解析—チョーサーの『トロイルスとクリセイデ』を中心に—

周 躍（呉工業高等専門学校）

本発表は「A Chaucer Lexicon」を利用し、主に形容詞に着目して、チョーサーの『トロイルスとクリセイデ』に登場する「恋の病」の患者たちの症状を分析した上で、詩人の他の作品や主な原典となる『フィロストラト』の同じ病気の患者たちの病状と比較し、チョーサーの創作技法や、作品に込めた意図を探っていく。

「A Chaucer Lexicon」は日本学術振興会の助成を受け（課題番号：20K13063）発表者が独自で開発中の多用途検索ツールである。本ツールは用例・作品本位で単語を一つずつ解釈し、独自のコメントを付けた上で、対象の語が置かれる文脈の原典や韻律、訳などの外的情報および話者、話す相手などの内的要素に関する情報も同時に提供する。発表では、本ツールのカスタマイズ検索機能を利用し、主に両主人公を修飾する形容詞を分類し、違う人の目にうつっている彼らの姿や、違う人と接する時の彼らの姿などを分析するほか、「病」の潜伏期間、発症、経過の病理も解析していく。

11. Middle English *mister*: Reassessment as a verb of need

三浦あゆみ（大阪大学）

The verb *mister* 'to need, be necessary' was introduced into English at the beginning of the fifteenth century by conversion of the noun *mister* 'occupation, service; need, necessity', an early thirteenth-century borrowing from French. Loureiro-Porto (2009) finds only three instances of the verb in her corpus of Old to early Modern English, and all of them are attested in *An Alphabet of Tales* (AT), a mid-fifteenth-century northern English translation of Latin *Alphabetum Narrationum* (AN). Since the verb exhibits neither

semantic nor syntactic features distinct from those of its contemporary synonyms, Loureiro-Porto observes that *mister* was chosen ‘in terms of a desire for linguistic variation’.

This paper will revisit incipient uses of *mister* in the fifteenth century with a survey of Corpus of Middle English Prose and Verse and a comparative case study of *AT* and *AN*. I will show that *mister* and four other verbs of need (*behove*, *bir*, *need*, *tharf*) in *AT* often differ in their behaviour, with varying degrees of Latin influence. The translator likely selected *mister* not simply for linguistic variation but based on careful consideration of the context in Latin and of syntactic and semantic features of the verbs of need available in the local dialect.

12. 14世紀頭韻詩韻律研究の現況と展望

—『ガウエイン』詩人の作品における前半行を中心に—

井上典子（関西大学）

長年、多くの研究者たちが、ME 頭韻詩の最も顕著な特徴の一つとして、その韻律の柔軟性および無規則性を主張していた。「韻律規則」(‘metrical rules’) と呼ぶことのできるようなリズムの規制が存在するとは考えられてこなかったのだ。しかし、1990年前後に、Hoyt N. Duggan および Thomas Cable が、前半行 (a-verse) と後半行 (b-verse) と呼ばれる二つの半行からなる非脚韻頭韻長行の後半行を支配する韻律規制を次々に発見したことがきっかけとなり、頭韻詩研究は一気に加速し、この30年で飛躍的に発展した。現在では、頭韻詩人たちが、実はチョーサーと同様、厳しい韻律規則の下で詩作をしていたことが分かってきている。発表者も、頭韻詩群の韻律構造および脚韻詩人と頭韻詩人たちが、それぞれの韻律条件を満たすために活用する共通の詩的技巧や工夫などを調査し、自らの研究結果に基づいた新たな非脚韻頭韻長行詩の韻律規則を提案し、その有効性を実証してきた。

今回の発表では、ME 頭韻詩韻律研究における現在までの成果を『ガウエイン』詩人の作品を例に取り、整理していきたい。具体的には、まず韻律構造の解明がかなり進んでいる後半行に関する主要なルールを考察した後、より複雑な韻律構造を持つ前半行に関して、現在の主要な争点と見解を検証する。このような整理をした上で、今後の頭韻詩研究の展望と可能性をより明確にすることが目標である。

13. 古英語の強変化動詞第Ⅳ、Ⅴ類における過去複数形の長母音について

藤原郁弥（大阪大学大学院）

古英語の強変化動詞のうち第Ⅰ類から第Ⅴ類に分類されるものは、その活用を印欧祖語における母音交替 *e/o/* ゼロまで遡ることができる。強変化動詞の現在形は印欧祖語の現在形に、過去形は印欧祖語の完了形に由来するため、動詞語根は現在形で正常階梯を取り、過去単数で *o* 階梯を、過去複数形及び過去分詞形でゼロ階梯をそれぞれ取る。しかし、強変化動詞の第Ⅳ類、第Ⅴ類の過去複数形では、ゼロ階梯に由来しない長母音が生じることが広く知られている。本発表では、強変化動詞の第Ⅳ類、第Ⅴ類の過去複数形で現れる長母音が生じた要因について、Ringe (2006: 272-275) に見られるような、PIE **h₁ed-* から作った完了複数の語幹 **h₁ie-h₁id-* > **ēd-* > Gmc. **ēt-* に加えて、一部の完了複数語幹において子音脱落とそれに伴う代償延長が生じた結果、長母音を持つようになり、これらが合わさって類推の要因となったことを論じる。

14. デヴォン州の地名 Misdon の語源再考

宅間雅哉（東京未来大学）

デヴォン州西部の農場 Misdon は English Place-Name Society による Survey (1925-2020) に従えば、OE *mist* を第1要素として現存するイングランド唯一の定住地名である。*The Place-Names of Devon* (1931: 150, 以後 PN Dev) は“mist hill”が語源で OE *dūn* を第2要素としている。本発表ではまず Misdon の第2要素について、PN Dev 中で現代の綴りが *-don* で終わる全地名の過去の綴り (early spelling) を検証した結果から、むしろ OE *tūn* “farmstead”が妥当と思われること、またこれらのうち第2要素が明示され、地図上の位置を特定できた例を対象に、25,000分の1地形図によって定住地が立地する地形を精査 (map-work) した結果から、OE *denu* “valley”も考慮の対象となることを指摘する。第1要素については、Misdon の定住地及び周辺の土壌の性質、同地名所在教区の Tithe Map and Apportionment (1842) による当時の土地利用の考察から、OE **mysse* “the marshy state of the ground”を考慮する必要がある。そして Misdon の新たな語源解釈として “mist farmstead,” “marshy valley”を提案する。

15. 中世英語英文学受容史：明治編

海老久人（神戸女子大学古典芸能研究センター客員研究員）

本発表は、英学史からも『日本の英学100年 明治編』（研究社、1968年）からもこぼれ落ちている明治の中世英語英文学受容の原風景を再現・復元する試みである。

明治3年中村敬太郎『西國立志編』の「英國歌詩ノ父ト稱セラル、朝色」を嚆矢とし、明治23年に別天樓主人が「日本のチョーサー」出現を待望し、「嗚呼、誰かチヨウサーたるべきぞ」（『江湖新聞』）と声をあげ、明治40年に山田美妙が「チョーサー、その人の傳記は如何に自分の頭を刺激したであらう！私は其時から自分も彼の如く俗文を以て文章界に立たうと決心したのである」（『文章世界』）と応じた。一方で、同じ時代、東京開成学校の教室では16才ぐらいの少年たちが、「外國教師」から出された試験問題「What influence respectively had Chaucer, Shakespeare and Milton on English Literature?」と格闘していた。こうした熱量はどこからくるのか。

明治期における中世英語英文学の紹介導入の経路は二つある。ひとつは翻訳をとおして日本文化への同化を目指すもの。今ひとつは近代学制の布置にともない、高等教育のカリキュラムに英語英文学が導入され、教養として教えられていた。

中世英文学の日々に

—池上忠弘先生追悼論文集—

チョーサー研究会／狩野晃一[編]

A5判／256頁／3080円(税込) 全15論文を収録

チョーサー研究会は、どのような人にも広く間口を開けて、チョーサーに限らず、古英語・中英語・近代英語・現代英語の言語と文学、歴史、美術に関する研究発表や講演を行ってきた。英語とその文学だけでなく、ヨーロッパ全体も見ておく必要があるし、歴史や文化も広く知らなければいけないという池上先生の言葉どおり、ここに集められた多様な視点を盛り込んだ数々の論考は、まさに池上先生の理想とされるチョーサー研究会のあるべき姿を表している。

英宝社 E@eihosha.co.jp 〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-7-7
https://www.eihosha.co.jp/ TEL: 03-5833-5870 FAX: 03-5833-5872

コメディ・オヴ・マナーズの系譜

王政復古期から現代イギリス文学まで

コメディ・オヴ・マナーズの系譜を劇と小説の面から考察した11論考。

玉井暉・末廣幹・岩田美喜・向井秀忠編著／A5上製・284頁／
定価本体3000円＋税／ISBN978-4-7553-0431-6

ピクチャレスクとイギリス近代

ピクチャレスクの多面性とイギリス近代における風景論の変容を考察。

今村隆男著／A5上製・486頁／
定価本体3800円＋税／ISBN978-4-7553-0421-7

ドン・ジュアン(上)(下)

現代でも色褪せない風刺的長編叙事詩 *Don Juan* の全訳を新訳で刊行。

バイロ著／東中機代訳／A5判・上・556頁／下・560頁／定価各
本体3000円＋税／ISBN978-4-7553-0418-7 / ISBN 978-4-7553-0419-4

ジョン・キーツと理想の詩的世界

詩人たちからの受容と変容

キーツの精神的形成過程と彼の求めた理想の詩的世界を考察する。

児玉富美恵著／A5上製・266頁／
定価本体3800円＋税／ISBN978-4-7553-0425-5

キーツ：断片の美学

ほぼ半世紀にわたりキーツの世界に親しんできた著者が伝えるその美学。

西山清著／A5上製・242頁／定価本体3800円＋税／
ISBN978-4-7553-0429-3

生粋のイングランド人

The True-Born Englishman (1700-01) の周辺の詩作品の本邦初
訳版。図版11点

ダニエル・デフォー著／西山徹編訳／高谷修／服部典之／
福本宰之訳／A5上製・216頁／定価本体3800円＋税／
ISBN978-4-7553-0417-0

音羽書房鶴見書店

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-26-13 ☎ 03-3814-0491 Fax 03-3814-9250
http://www.otowatsurumi.com e-mail: info@otowatsurumi.com

BOYDELL & BREWER

New Medieval Literatures 22

Edited by **Laura Ashe, Philip Knox, Kellie Robertson and Wendy Scase**
Hardcover 9781843846239 March 2022 \$85.00



Annual volume showcasing the best new work in this field. New Medieval Literatures is an annual of work on medieval textual cultures, aiming to engage with intellectual and cultural pluralism in the Middle Ages and now. Its scope is inclusive of work across the theoretical, archival, philological, and historicist methodologies associated with medieval literary studies, and embraces the range of European cultures, capaciously defined.

* 国内洋書取り扱い各書店にてご注文承ります

* 内容のお問い合わせ : Boydell & Brewer 日本代表オフィス ユーリカ・プレス

Email: ky6844@celery.ocn.ne.jp / Tel: 075-741-6631

朝日出版社

||| 審査用見本デジタル版 閲覧サービスのご案内 |||

朝日出版社では、従来どおり紙媒体での教科書見本に加えて、新たに「審査用見本デジタル版」閲覧サービスを開始いたしました。教科書をご審査いただくにあたって、時間と場所にとらわれず、さまざまな教科書の見本をパソコンでもスマートフォンでもご覧いただけるようになります。是非ご活用ください。

「審査用見本デジタル版」を閲覧いただくには、IDとパスワードでのログインが必要となります。ご登録用IDとパスワードの発行をご希望の際は、右記サイトよりご登録のお手続きをお願いいたします。

<https://text.asahipress.com/special/publulite/>

朝日出版社 電子見本

検索



審査用見本デジタル版
トップページ



審査用見本デジタル版
見本例



お問い合わせは右記の朝日出版社英語テキスト課へお願いいたします。 朝日出版社英語テキスト課 : text-e@asahipress.com